同人作品

故郷八女　　秋山義仁

愛睦み何も戻らず時の壁未だに想う我は老いすぎた
左手が右手をつかみくるりとし抱き止めて口付けした夜
開墾時見た白煙の国鉄矢部線（ヤベセン）は昭和に生れ昭和に死んだ
八女の福島は昔城下の老いた町歯抜け髪落ちでも生きている
川掘れば縄紋の田掘れば弥生の山には阿蘇の軽石の故郷八女（ヤメ）
虚弱児ロンドンパリ目の僕もやがて餓鬼大将でも女は見れず
進学しデパ地下バイト十九で斜視手術やっと女性を見れた
人だもの生きて稼いでしがみつく弾（ハジ）きの毛虫生きてる限り

宗像の和みの前方後円(コフン)墳点々と緑の中に君は棲み描く

何をしてすごそう残りの二〇年人生百年旅に出ようか君とすごそうか

風が飛びつばめが走り虫逃げるきっとこれから暑い夏来る

諫早の干拓地先の湖止めの春の名残の八重桜散る

ひだまりはもう暑すぎて上着脱ぎとびだす町の弾ける誘惑

十三夜走るにはもう遅すぎる忘れたいから磯まで走る

日が暮れるセピアの水俣霧が出るはぐれ鴎の影ゆれる

駅前の店の閉まった廃れ街魚焼く匂い流れる夕焼け出水(いずみ)（水俣）

出水から見え隠れ東支那海勝手に線引く共産中国

川内(センダイ)で初めて見たよ女の子影伸びて駅の中「ママ、ママ！」

学校で家で僕知る隣の娘(コ)倒れしと聞き郷里で足さする

故郷は岩戸山古(コフン)墳の端まで茶畑に家やたんぼ減り茶園はふえる

レッスン・ワン　石邉綾子

幾重にも光プリズム放ちつつ仮面の男女が渡るこの橋
老いるとはコミック本の展開に置き去りにされゆくこともがな
いざ銀座ガス灯通り四丁目ギュンター・ローベのガイゲ抱きて
左手を伸ばした先のスクロール造形ひとつに心捕らわれ
昼夜なくレインブルーのケースから出しては眺め飽きることなく
毛筆の擦れの先に幼少のわれを重ねて恩師を思う

朝　井上省吾

朝が来たすばらしき日の始まりだ四時には起きてやること決める
目を覚ましまず有難う声を出し手足を伸ばし動き始める

夜明け前未だ外暗く部屋の中明りをつけて台所立つ
夜明け前星が輝く外へ出て燃えるゴミ出し生ごみ持って
朝早くひんやりとして肌寒くマスクを着けてごみ捨てに行く
玄関の防犯灯がお見送り帰ってくるとお出迎えする
台所流しの前でひと仕事御飯の仕度我家の土鍋
朝飯は肉みそ炒めドンブリに全部食べ切り栄養となる
朝飯を残さず食べてホットする体力をつけ草取りへ行く
朝寒くこのひとときが大好きだよき知恵浮び物事進む

光熱費対策

電気代上り続けて考える電気使わず発熱布団
寒い日も重着をして我慢して湯タンポ出して手足温め
蓄電池うまく使って節電し屋根の上にはソーラーパネル

早く寝て発熱毛布包まって暖かくして朝まで過す
浴槽に半分ほどのお湯を溜残り湯使い洗濯をする

思い出

上高地カッパ橋そば宿泊しトランプしたりお話したり
上高地熊が出るとの立札に気を使いつつ散歩楽しむ
船に乗り桜の花を眺めたり写真を撮りあとで楽しむ
山登り息もはずんでやっとこさ下を見下ろし帰りがこわい
目的地目指して歩き疲れはてここらですこしひと休みする
いろは坂車で登り目的地曲りくねった坂を見下ろす
ホテルから目の前に見る城があるあの有名な熊本城
車にて家族揃って熊本へ阿蘇山通り大分へ行く
阿蘇山で熊牧場見学し水の湧き出る水源地見る

大分は地獄巡りに汗をかき高崎山で猿の餌やり
夏休み一家揃って旅に出る長野方面トンネル抜けて大町を行く
アズミノの山葵園にてアイス食べ黒部ダムにて放水を見た
白馬向け車走らせ湖を三つ見ながら山道を行く
車止めブルーベリーの農園でひと休みして白馬の宿へ
姫川で気球に乗り遊んだり魚を取って焼いて食べたり
親不知海岸へ向け車にて翡翠の川を見ながら海へ
この浜は砂浜でなく石ころで遠浅でなくすぐ深くなる
カニのこと地元の人に聞いてみた畑のこやしこの人は云う
このルート何度か通う夏休み想い出される若き日のこと
地図を見てよくぞここまで旅をしたカーナビなどない想い出たどり
我家では旅をするのは車のみ金も無いのによく旅をした

都合よく楽しいことを思い出す頭の中は選別優れ

福祉大国　　**甲村雅俊**

熱あれば眼のみ鋭く寝たきりとなりたる父は首を傾げる
一様に終り迎へるわれらなり福祉大国日本に生きて
季節感くづれくづれて南海に十一月の台風生まる
いくつかの家財道具を始末してこの家を尚長生きさせる

太平出版社

大学を出て勤めたる出版社社員幾人なつかしきかな
三月に卒業したるのち職を探すモラトリアム青年は
出版社募集してゐるではないか新聞求人広告欄に
洋服の青山に行き吊るし買ひ袖を通して社会に出づる

差し出され名刺受け取るその際に第一声は朝鮮人です
頂きし名刺にメモを取らうとする吾をたしなむ苦笑ひされ
入社するまでに必ず読みなさいシュテファン・ツヴァイクのマリー・アントワネット
社名には特段の意味ないらしくわが勤めたる太平出版社
社長とは呼ばせず苗字を呼ばせたり家父長制の権化の人は
なぜこんな昔のことを歌に詠む死亡フラグの立ちたるわれか
歌詠みは歌詠むときぞ真剣にこれが辞世と思つて歌へ
初恋のやうな勤めの日々にして早稲田鶴巻町の青春
君が代に会ひたい人はみな鬼籍その筆頭に崔容徳さん

おはよう　　氷室敬子

しんしんと更け行く闇生きている電車の音も聞こえない

介護ベッドに溜め息つけば皺深き老婆の歎き聞こえくるなり
あ、あらあらわたしでしたね息をととのえる
飴玉に口中の乾き潤いておはようと始まりの声

十三夜　　本田洋子

あしたから涼しくなると毎日言う気象予報士ペテン師に見え
待ちに待ちこの涼風に会える日を長き猛暑を無事乗り越えて
店先にくりなしぶどう勢揃い季節はじんわり移行して居り
初みかん暑さ疲れに浸み渡る甘く酢っぱくビタミンCと
眼が冴えて悶え悶えし不眠の夜疲れを知らぬ筈はないのに
ベランダに共に息する友を植えし色とりどりのケイトウの花
東天に明るく光る月登る今宵は冴えた十三夜なり

この香皆が歌へる金木犀今年は遅れ秋も遅れて

何一つ神の恩謝に預からぬ物無きことは吾にも分る

このお米無農薬だと言われしも味の違いの無きぞ悲しき

感謝せよ感謝せよとて尻叩く彼女が夜叉に見え始むなり

神無月

街路樹の落葉も秋を歌ってる濡れた舗道にはバラードが似合う

雨季が来て一気に秋を連れて来し夏との別れは充分にせり

赤黄色中禅寺湖の紅葉は自然が織り成す錦絵の如し

朝晩の気温下がりて神無月末ともなると布団が増えて

神々は出雲の大社（おおやしろ）にて何の協議を成さるるかしら

立冬

富士山の初冠雪も一ヶ月遅れに遅れ十一月のこと

秋無くて今日は立冬冷え込みて暦通りに冬だけは来ぬ

東京では木枯らし一番吹いたそなこちらはぽかり陽射しの温もり

赤い実は今はオレンジそのうちに真っ赤に変身ピラカンサスか

皆逝きて一人残りしこの命会える人には会っておきたし

暮れ残る茜の空に星一つ子供の頃より見てきた景色

母を葬る　　丸山光

おしんよりわたしの方が辛かったつぶやく母を邪険に扱う

お茶受けは母の愛した桜餅押しいただいて手のひらにある

十三年母のお風呂を受け持ってついに介護の人に委ねる

振り切ったつもりの母がついてくる門出の春の入学式に

「お前がいなくなったら生きられぬ」と言いながら兄の名を呼ぶ

救われた丸山カネが本名で俗名もなく戒名もなし
母の日の母は短歌を口ずさみ私の歌と忘れてつぶやく
母の日の祝いを受ける母はなく母への想い歌に託する
母の日とわが誕生日かさなりて「何もいらない」「あげないからね」
亡き母が私を産むため少量の出血ありと手帳にありき
わが母はマリヤのごとし一瞬にシスターの顔こわばり始む
手作りの私のためのセーターを母の遺品に二枚みつける
出棺の柩は花に満ちあふれ遺体の母は崩れ始める
「お別れです」柩の蓋は閉められる「はい」と答えてしまう愚かさ
事務室に分骨のため通されて母入る窯をモニターで見る
モニターで焼かれる柩みておりぬ魂までも焼き尽くされり
骨揚げをまつ間の時間みじかくてひとり一人の思い出ゆたか

リューマチの母の遺骨はわずかにて私の分まで入る骨壷
前夜式告別式と母葬り遺骨を抱いて死を確かめる
会葬状余ればゴミに捨てられて箱と礼状分別されて
葬儀終え私の知らない人々へ一期一会の挨拶まわり
母親は良い人でした悔い残る想いの果ての独り言です
暗がりに骨壺あけて骨に触る母の本音を探らんために
骨壷の置かれし母の部屋で寝る私を探しに誰も尋ねず
骨壷は遺影に眺められている人は死してのち自分を見つむ
骨壷の主役の母を忘れかけ兄弟集まり最後の食事
納骨は骨と遺影の別れる日今日より後はそれぞれの胸